

第七 古 戰 場

本村は長水城の落人宇野氏最後の決戦を爲せし地なれば所々に遺跡多く殊に千草土井久、岩野邊新宮河呂大森は劇戦の跡たり其の戦況を左に記さん

天正年間宇野下總守政頼は揖東、揖西、宍粟、神西、但馬國內の一部と五郡を押領して本郡石生郡五十波村長水城に居て、伊和郷岡城の山城には政頼の臣岡城豊後守を、杉ヶ瀬の城には政頼一族日向守祐久を、たゞ家郷都多村の城には政頼一族采女正祐政を、千草郷黒土の城には其家臣石原右京をして守らしめ其威近國に振ふ、然るに姫路城に居る小寺官兵衛孝高と政頼との間に私怨あり羽柴秀吉播磨に

下りし時小寺は私の鬱憤を晴さんと秀吉に種々讒言を爲せり、故に政頼は秀吉の歓心を失ひ遂に攻略せらるるに至れり。

天正八年秀吉は先勢一千騎を以て荒木平太夫を大將として林田通りより、次の一軍三千騎は小寺官兵衛を大將として嘴崎通りより、次の一軍一千騎は神子田半左衛門を大將として林田通りより、後陣秀吉自ら木村、竹中、石見、樋口を從へ出發す、政頼之れを聞きて狹戸へ宇野藏人祐清を大將として宇野内匠行義、春名修理光俊、小林三河重清、同兵庫重周、同内匠重吉、田路信濃貞政、岡城豊前守吉正、田路五左衛門貞年等一千餘人騎馬百五十騎を、香山へは宇野右衛門督祐光、同采女正祐政を大將として、神山但馬正明、石原勘解由光時、横野六郎太夫親義、宇尾墨勘助勝時、廣瀬七郎兵衛周數、石田小兵衛資景、横治三良兵衛信友、阿甫助太夫爲重、大將羽翼の侍には下村先生則長軍勢百餘人騎馬七十三騎、この兩軍四月一日狹戸、香山に向ひたり、狹戸、香山に於て六日に亘る大合戦、宇野が勇將祐清、祐光神出鬼没大に奮戦せしかば秀吉軍は一時敗れたるも犇々と姫路より後詰の軍兵を繰出す故に衆寡敵せず次第に退きたり、茲に於て宇野勢も五十波三津々の百姓に命じて長水城に兵糧を運ばせ籠城すること、なしたり。

抑本城たるや東は三津々山、西は都多山、南は險坂、險阻屏風の如く要塞堅固なること實に播磨第一と稱すべし。

宇野より使者をして美作小原山の城主新免伊賀守に援兵を乞ひたりき秀吉は高家(今の山崎附近)に陣を取り生谷村まで進む、宇野軍は上の瀬へ岡田、横治、中の瀬へ祐清、祐光、下村、内海、長谷川、下の瀬へ阿黒、岡城を以て防禦を固めたり、伊澤川に據りて双方數度の合戦ありしが遂に四月十八日荒木、神子田の軍勢城崖に肉迫したりしが籠城の宇野軍奇術を盡して戦ふにぞ流石の敵軍も大に惱まされたり、いかに智謀に富めるも宇野が勇士は戦ふ毎に城兵減して援兵なく、秀吉軍は幾千となく後詰の精兵を雲霞の如く集むるにぞ、要害堅固の名城と雖今は早や力盡さんとす、處へ伊和郷岡城より岡城豊後守軍兵引連れ援軍となりて馳驅し暫し城兵と共に敵軍を挟み撃ちにせしかば流石の神子田勢も敗北したり、この由を秀吉に注進すれば又三百騎を附して宮川五郎兵衛をして伊和郷岡城を攻めしむ、岡城の家臣上原は伏兵を以て難所を防ぎしかば宮川勢五十波に引返したり、秀吉大に驚き又千騎を以て攻め寄せしかば上原討死し岡城は亡びたり、宮川勢は百三十人の首級を得て五十波に歸りたり故に後顧の憂を断ちしにより又一齊に長水城を攻めたり、之れぞ四月二十六日なりき、城兵今は窮鼠の軍なり必死となりて戦ふ宇野軍には強弓の名手多ければ敵陣に火矢を放つなど散々に敵を狼狽せしめたりき、五月二日に至り秀吉は中村、柏木、堅田、石田、小寺、中島、石見、樋口を始め曾根、高砂、英賀、志方、鎧萬、別府、神東、神西、加東、加西の同國人及び近江、美濃、尾張、三河、遠江其外五畿内の軍勢と共に大舉して之れを攻む、故に三月城中より夜討として大手一番には平瀬新助、

船曳藤八良、井上三治、黒岩等、二番手には山本主馬之助、辛川半左衛門尉、眞島七郎兵衛尉、片山、三木等、三番手には中村宇右衛門尉、林新治郎、芳賀八郎、松田、川崎等をして弓鐵砲を以て討出でたり、之れには秀吉軍も大に苦しめられ、遂に城兵の勝利となりたり、七日に至り長水表にて秀吉の軍大に敗れたりと姫路へ聞え、羽柴小市郎秀長は驚き慌てゝ、山本新兵衛、平塚八郎、長濱甚吉、海津糸八郎、宮部、中島、島根、羽栗、春日部、板垣、三澤、大原を始め三千騎を以て秀吉の陣に馳せしめたり、依て曾根、志方、明石、英賀の同國人加はり伊澤谷(今の葛澤村)五十波谷(今の梯)に集れり、八日城中にて落城も旦夕に追れば討出てんに如かすと又一番手には宇野祐長隨兵中村宇右衛門尉、林新次郎、英賀八郎、大崎、松尾、瀬川、進藤、田上、長谷田、山下を始めとして騎馬三十騎を以て固め、次に宇野帶刀祐義四百餘にて三手に分れ、隨兵辛川半左衛門尉、山本主馬之助、長泉寺太郎左衛門、平瀬新助、舟曳藤八良、井上、三澤、黒岩、三木、松田、川崎、長尾を始として騎馬四十騎にて固め、三番手には春名修理光俊百餘人を以て隨兵太田、横山、田中、進藤、永井、良山を始として騎馬三十騎にて討出でたり、城兵元より討死と覺悟し獰猛なる數度の激戦には一步も敵に譲らず合戦三十度に及べども秀吉軍に一度も利あらざるを大に憤り、後詰の軍兵八千六百餘人を引率して攻め圍みたり是ぞ最後の合戦なり、宇野軍本丸には從五位宇野下總守源政頼を始として執事宇野内匠頭行義、政頼の子息藏人祐清、一族右衛門督祐光、同宇野采女正祐政、石原右京太夫利房三百二十餘人

外に小林兵庫重周、同戸兵衛重宗、同内匠重吉、同和泉重則、同長右衛門重長、同甚左衛門重時、同興兵衛重俊、五百四十餘人控へたり、二の丸には政頼の一族宇野宇兵衛頭祐泰、出丸には同一族宇野主計祐明等總勢合して二千二百三十餘人必死となりて防ぎけり、今は衆寡敵すべくもあらず、城兵討死したる者實に一千百餘人、大手の大將宇野帶刀祐義、副將宇野佐右衛門頭祐長、搦手の大將春名修理光俊、部將長泉寺太郎左衛門尉泰俊、山本主馬之助、中村宇右衛門尉、平瀬新助、舟曳藤八良、林新次郎、芳賀八郎、大崎定右衛門尉、井上六郎、眞島七郎兵衛尉、辛川半左衛門尉、松尾與市郎、三澤右京、瀬川六左衛門尉、黒岩源八郎、進藤佐太郎、三木新八郎、田上彦右衛門尉、松田彌惣右衛門尉、長谷田忠右衛門尉、山下四郎兵衛尉、同舍弟左吉郎、長尾三左衛門尉、太田絲三郎、横山五郎左衛門尉、田中吉左衛門、安東治郎兵尉、久美太郎兵衛尉、岩本彌吉郎、萩原幸右之尉、永井元悦、良山長右衛門尉、森多左衛門尉等の面々を始として宗徒の勇士三十餘人討死せり、金瓢の到る地従はざるなき豪傑秀吉も一萬六千二百餘の大軍を擧げて死力を竭したるか一時風前の燈火ともなりしも漸く長水も落城したり。

茲に憎むべき不忠漢、安積領主安積將監泰昌は敵將小寺官兵衛孝高と内通し密に謀反の志を懷き居りしか味方の諸將本丸より討出でたるを幸ひ小林兵庫重周、同戸兵衛重宗と牒し合せ一度に火を放つて焼かんことを謀る、泰昌の子息久藏泰長之れを聞きて父に諫言すれども聽かず、依て久藏は主君宇野政頼に注進せんとすれば早や城は猛火に包まれたり、茲に於て宇野氏は逆臣ありと見て城中を遁れ出で落ち延びたり、かくと見たる秀吉は荒木、神子田、樋口石見の四人を大將として國人梶原、新庄、別府、中川、明石、英賀、笠原、柏木、吉村、芳賀、志方、曾根、北條、肉粟(宍粟のこと)神東、神西の兵を相添へて宇野が跡を追ひ討たしむ、宇野氏は小茅野を経て鷹巣(今の別府原)に來り暫し息繼ぎ其臣下村治郎左衛門等の計畫を容れて後より來れる味方の手勢を糾合して黒土に一砦を結び三男作州小原の城主新免伊賀守宗近の援兵を籍り再舉を圖らんと協議し居たる一刹那遙か向ふの山の尾先より軍勢三百許り馳せ来る政頼大に驚きよく見れば安積久藏泰長なり、政頼蹶然起て大に怒り彼の父は戈を倒にして城を焼き子は落行く主人を追討たんとす憎みても餘りありと切齒扼腕し居たり、稍近くに及びて久藏馬より下りて兜を脱ぎ弓弦を外し從者に渡し半町許り彼方に平伏す、政頼怒りに乗じて太刀振り翳し將に兩断せんとす、次男祐清、治郎左衛門等押止めて、主従の縁は未だ絶たれず彼に敵意あらば何ぞ兜を脱し弓箭を委ねしや必ず仔細あるべしと、政頼さらばとて言語荒らゝげ「逆臣將監の子何が故に茲に来れるか」と詰問すれば、久藏潺然涙を流して言へるやう、父將監は敵に内通すと聞くや、不肖切りに諫むれども聽かず、詮方なければ寧ろ本丸に走りて事の由を言上せんと立出づれば既に本丸は火焔天に漲れり、主君は既に落ち行き給ひしと見るや、御前途見届け申さんと斯くは馳せ参じたる次第なり、久藏茲に来れるは父の不忠を証ぶるに非らず茲に引具したる輩は長水恩顧の士

なり、願くは召して再舉を謀られよ、久藏は不臣の子なり、敢て更に與する處にあらずと太刀を抜て自盡せんとす。政頼初めて事由を解し汝か義心感せり暫く猶豫すと祐清傍より聲を曇らせ言へるやう假令ひ將益城を焼かすとも形勢次第に衰運に趨きつゝありしかば落城すべき長水なり、素より討死は覺悟せりと雖事茲に至れるは殘念の極みなりと打泣けば竝居る面々聲を上げて號泣せり。

下村等の勧めに従ひ追々落ち來れる軍卒を集めて總勢四百八十人許黒土を過ぎて千草に入る、時に秀吉の軍勢既に先鞭を着けて千草に陣地を構へたり。

宇野勢の作戦計畫全く水泡に歸し漸く辛して大森山麓(字大寺)に野營を作りて前途の計畫を爲す、この日雨降り續き將士皆疲勞して戰ふべくもあらず、この上は愈作州に走るの外なしと下村等に全軍を托して總攻擊をなさしめ、其間に於て西奔せんと一決して敵に向へば敵の強將荒木平太夫一陣に馳せ向ひたり。宇野の家臣小林三河重清は強弓の達人なれば、荒木の軍に見へたる逆臣小林戸兵衛に向ひ「おのれ重恩の主君に背き奉る犬士め不忠の程思ひ知れ」と滿月の如く引き絞つて放てば過たず逆戸兵衛が胸板貫きて倒れたり、矢種の限りは邊りの勇士を數多射斃したれど、味方は少なく敵は多く逆も敵はじと一同自ら陣を燒きて西に向ふ、偶霖雨の後にて千種川増水して徒渉す可らず、下村等川に臨みて嘆じて曰く「天何ぞ宇野家に災するぞ」若し流を亂して溺死せんか末代の恥辱なりと無念措く處を知らず、政頼等事の茲に至れるは命なり死處を得ざれば恥多し屑く討死すべしと覺悟を定むる

處へ荒木平太夫追撃し來る、政頼最後の思出に萬望の一を達せんと手槍を執つて荒木に向へば、荒木も得たり賢しと雙方挑みけるが政頼は槍の名人荒木は名に負ふ強の者、零時が程は鎗を削りて戰ひけるが政頼が突出す槍の穂尖は荒木が頬より口部にかけて貫きければ流石の荒木もこは敵はじと一目散に逃げ去りたり。荒木が缺唇となりしは此時なり、是より先き秀吉は千草に宇野一族ありと聞き、神子田半左衛門に兵を付して來り擊たしむ、此時神子田到着し荒木の軍と合して大舉來り攻む、政頼は後ろに水、前に大敵窮極遂に出する處を知らず、此時に方り遙か川向の山上(今の大森の段)に是ぞ美作國小原竹山の城主新免伊賀守の一族新免宗近五六百の援兵引き連れて來り信號の笛を吹鳴らしたるにも拘はらず政頼思へらく早や敵は川を涉りて邀撃を圖れるなりと誤認し百計既に盡き今は詮方なしと、軍を春名一族石原勘解由等に托し彼等が戰へる間に山上(今の大森の段)に登りて遙かに長水を伏し拜み武運盡きたるを告げて、宇野下總守政頼(年五十八)民部大輔祐清(年二十八)右衛門佐祐光(年二十八)采女正祐政、宇野内近行義等一族皆自刃し、下村治郎左衛門則長、安積久藏泰長、石原勘解由光時、神山但馬正字、宇尾墨勘助、廣瀬七郎兵衛周數、石田小兵衛資重、横治三郎兵衛信友其他侍分三十二人士卒九十五人皆殉死す、これぞ五月九日なりき。

去ぬる四月朔日より晝夜軍神と謳はれし羽柴が軍と戰ひつゝ四十日に亘る宇野の大奮戰、嗚呼獅子身中の蟲さへなくば可惜長水も落城せまじきものを、宇野が孤軍奮闘敵軍に降伏せざりしは宍粟武士の

氣魂を示し後世の龜鑑たり、今は千草古戰場となり、靡きし幾流の旌旗、鏘然と鳴りし鎧、黒絢紫威の華やけき鎧、雄々しさ軍馬の嘶きも今は昔の夢となり、夜嵐吹かば漫ろに悲哀を傳ふ、墓所の松は亭々と雲を衝きて昔の雄々しさを語る、秋夜嘲く蟲聲に悲憤慷慨の念をそゝらしむ、屍は地下に眠れども宇野勇士が士魂長へに拵す、小林、安積の逆臣も久しからずして汚名を止むるのみ。

或人の俳句に

長水の名は流さじや五月雨